

# 博物館 Dictionary No.224

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

てんじ かいせつ  
展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

## 「おなら」の絵巻 — 福富草紙 —

「日本美術」と聞くと、なんだか渋くて難しい、つまらないものだと感じてしまう人は多いかもしれません。確かに、歴史が苦手だったり、神さま仏さま、花や鳥に詳しくないと、なかなか近づきたい気がしますね。

でも、昔の人たちだって私たちと同じ人間。中には、格好つけずに、笑い転げて楽しんだらう作品もあるのです。

ということで、今回ご紹介する作品のテーマは、みんな大好き「おなら」です。



図1 重要文化財 福富草紙 室町時代(15世紀) 京都・春浦院蔵(部分)

作品の名前は「福富草紙」。福富という男が登場する短い物語を描いた絵巻です。

まず登場するのは、高向秀武という老人。長年の貧乏暮らしに悩み、神社で熱心にお祈りをしたところ、なんと「おなら」がきれいな音楽を奏するという珍芸を習得しました。

(図1)は、はじめてその芸を披露した場面。右の秀武が腰を大きくひねって「おなら」をすると、「綾つつ錦つつ黄金ざくざく」と、景気のいい音楽が聞こえます。以前から秀武の相談に乗っていた坊主は大喜び。屏風の裏側にいる女性も「腸がちぎれる」と大爆笑です。

「おなら」の芸は貴族にも大ウケで、ご褒美をたくさんもらいました。こうして暮らしが豊かになった秀武を羨ましく思ったのが、隣に住む福富夫妻です。福富は秀武に弟子入りし、珍芸を教えてもらおうとします。しかし、秀武は嘘の方法を伝えるのです。

芸を習得したと思いこんだ福富は、貴族の屋敷で「おなら」をしようと思いますが、一向にきれいな音は出ません。それどころか、秀武から教えられた方法が下痢を誘うものだったので、福富は便をまき散らしてしまいました。



図2 重要文化財 福富草紙 室町時代(15世紀) 京都・春浦院蔵(部分)

当然、貴族は激怒。部下に命じて福富をボロボロにしてしまいます(図2)。血みどろになった福富は、杖をついて何とか帰宅するも、妻にもひどく罵られました。なんとも情けない結末です。

ちなみに、図をよく見ると、人物の周りに文字が書かれています。これはセリフです。絵巻で、絵の中に文字を書き込むのは特殊な表現で、こうした字句のことを「画中詞」と呼びます。まるでマンガの吹き出しのようで、ワイワイと声が飛び交うにぎやかな雰囲気が演出されています。

さて、何かで成功した人物を、隣に住む欲深い者が真似して失敗するという話は、「花さかじいさん」や「舌切雀」などでみなさんもご存知でしょう。こうしたパターンは昔話によくみられるらしく、文学の研究では「隣の爺型」と呼ぶようです。でも、「福富草紙」は秀武が福富をだますところが少し特別ですね。その報いか、秀武は怒り狂った福富の妻に路上で嘔みつかれてしまいます(図3)。



図3 重要文化財 福富草紙 室町時代(15世紀) 京都・春浦院蔵(部分)

「福富草紙」は「おなら」の芸を取り巻く喜劇で、人物の大きな身振りや、ひょうきんな表情など、庶民の生き生きとした世界が描き出された楽しい作品です。でも実はそれだけでなく、この一見くだらない話の中に、人を羨んだりだましたりする欲深さや、散々に失敗してしまう滑稽さなど、格好をつけていないからこそ見えてくる人間の真実の姿が、親しみを込めて語られています。だからこそ、この絵巻では、生きていく以上誰しも避けて通れない「おなら」という普遍的で深遠なテーマが取り上げられているのでしょう。

(美術室 井並林太郎)